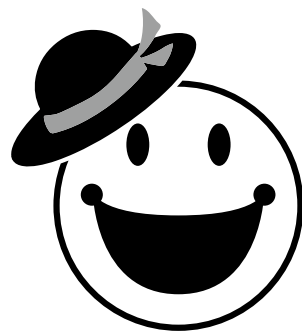


「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗 第13回

友達感覚の父親

◆友達感覚の父親の落とし穴

昔の父親は家族のために狩りをし（外で働いて）、怖くて絶対的存在でした。現代では男女平等やイクメンが当然の善として定着しつつある中、「地震・雷・火事・オヤジ」という表現も死語となり、近頃まったく聞かなくなりました。現代の父親は、良きにつけ悪しきにつけ、子どもにとってすっかり身近な存在となりました。たとえば子どもと一緒にゲームをして、子どもと同じ目線で一喜一憂し、負けて本気で悔しがったり勝ってはしゃいだりします。

父（子）「よーし、ゲームもう一回やろうよ」

子（父）「もう遅いから寝た方がいいよ」

父（子）「ずるい、勝ち逃げ無しだよ」

子（父）「わかったよ、じゃ、これで最後ね」

このセリフ、父と子を逆にしても成り立ち、二人が同じ土俵にいます。良く言えば、子どもとのコミュニケーションがよく取れているお父さんです。

「お父さんが好きですか？」というアンケートをとると、昔と違って8割以上の子どもたちが「好き」と答えます。しかし、「悩み事は誰に相談しますか？」と聞くと「友達・親友」が圧倒的に多く、「父親」は下位。「お父さんは優しくて楽しい、友達みたいな存在だけど、相談するほど頼りにはならないし、悩み事は聞かれたくない」と思っているのでしょう。

◆父性と母性、役割がある

このような父子関係を築いてしまうと、いざ子どもが過ちを犯したとき、父親が叱っても効果はありません。「なに急に大きな声出して、どうしたの？」と、叱れば叱るほど子供にシラケられてしまいます。

「うちのお父さんは叱れないんで」と言うお母さんがいますが、そういったお父さんは叱る場面でも、つい優しくしてしまうのではないのでしょうか。「父性」と「母性」という言葉がありますが、公の場での振舞いを厳しく教えられる「父性」、叱られたあとフォローしたり、優しく接してあげる「母性」の役割が区別されていないと、いざというときの「父性」が発揮されなくなってしまいます。

父親はちょっと子どもと距離があって、「怒ると怖いんだよな」と思わせることができていないと、お母さんでダメなときの最後の砦（とりで）が無くなってしまいます。子どもが小さいときには「友達感覚のお父さん」でも一見問題は無いように見えますが、「抑止力」不在の家庭では、思春期になって一気に問題が噴出します。

厳しく叱るのは大変な作業で、一緒に子どもと遊んでいる方がラクなのです。おじいちゃんは孫を叱らずひたすら溺愛しますが、父親がおじいちゃんのようになってしまっただけでは父性不在の家庭となってしまいます。家庭によっては、お父さんが母性役、お母さんが父性役でもいいのですが、母親が母性役、父親が父性役を担当するのが自然でしょう。

【ヒント：父親の地位を保つ、賢い母親】

「お父さん今頃お仕事頑張っているね。お父さんのお蔭でご飯が食べられるんだよ」、「お父さんに聞いてみて、OKって言ったらね」など、お母さんは子供たちに父親への感謝の気持ちを表し、家庭の主導権・決定権は父親にあることを教える必要があります。お母さんが普段からお父さんの愚痴を子どもに聞かせていると、お父さんの家庭での地位が低くなり、いざというとき父親が叱っても子どもは従わなくなり、思春期に多くの家庭が崩壊していきます。

◆友達感覚の指導者は・・・

私は、15年前に指導を始めたとき、自分に自信が無く「友達感覚の指導者」でした。休憩中に子どもたちと友達のように楽しく雑談していましたので、稽古が始まって休憩気分の抜けない子どもたちに毎回苦勞させられました。

ある時「これは間違えている」と気づき、それからは、休憩中、子どもたちと少し距離をとり、雑談したりするのは「母性」役の他の指導者に任せ、私は「父性」の指導者に徹するようにしました。

子どもたちは、休憩中は「母性」の指導者とおしゃべり、稽古中は「父性」の私の指導を私語なく集中して聴く、というように、休憩と稽古の切り替えがはっきりとできるようになりました。ただし、子どもたちが何を考えているかは大変興味があるので、稽古が終わった後、母性の指導者に毎回、子どもたちとどんなことを話していたのか質問攻めしています。

指導者が複数いれば良いのですが、指導者が一人の場合もあるでしょう。そのようなときは、「叱りながらも冷静に」、「そのあとで褒めてフォローしている自分の姿を想像」しながら、叱ったり褒めたりしなくてはなりません。父性と母性を一人二役、兼

任しうまく使い分けるのです。もちろん、人材がいれば複数の指導者で、父性・母性を分担して指導した方が、精神的負担が軽減されます。

いずれにしろ指導者は友達ではありませんので、子どもと指導者の間には一本、線を引かなくてはなりません。その線の太さは、道場によって、また指導者数によって異なると思います。あまり太い線ですと、子どもと指導者の距離が遠く、指導者を怖がり何も相談できなくなってしまいます。一方、あまりに細い線ですと、友達感覚の関係になり、どちらが指導者でどちらが生徒か分からなくなってしまいます。子どもの悩み事を聞いてあげたり、子どもが本音で話せる環境を保持しつつ、子どもたちが節度をもった稽古態度で取り組める距離感が理想でしょう。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。先代が病氣となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2014年、2015年と2年連続で全少7名入賞させる。道場経営でも、一道場で300名を超える大躍進。

日本空手道鴻志会空手道場養正館／静岡県沼津市本田町 11-12



Column

「心のコップカード(その3)」 各論 2・あいさつ

「あいさつ」のキーワードは、①「相手より先に」、②「相手の眼を見て」です。近所のおばさんが「こんにちは」と声をかけてくれましたが、お母さんの後ろに恥ずかしそうに隠れてしまいます。おばさんはもう一度、「こんにちは」と声をかけてくれました。仕方なく「こんにちは」。これは、「あいさつ」したのではなく、「あいさつ」させられたのですね。心のコップが上向きのあいさつは、「こちらから走って行って、自分から先に！」です。「ごめんなさい」「ありがとう」も相手より先です。

「あいさつカード」の通信欄から、ママさんの声をお聞きください。

●先日、年配の男性が散歩をしていたところに、大河が「こんにちは」と挨拶をしました。その方は「毎日散歩をするけれど、子供さんから挨拶された事はない。とてもうれしい」とおっしゃいました。そう言われて大河もうれしそうです。(年中／岡嶋大河君)

●学童の帰り、校長先生に「こんにちは、さようなら」と翔海からあいさつしました。「君は朝も気持ちの良いあいさつ

をしてくれるね」とほめていただきました。(小2／金子翔海君)

●朝、幼稚園まで歩いていく道で、初めて会う人でも元気に「おはようございます！」と、ごあいさつができています。はずかしがり屋だ、とばかり思っていた惺人が、たくましく見えてとてもうれしかったです。(年長／土屋惺人君)

●園バスの先生や空手で会うお母さん達にも挨拶をする意識が芽生えてきたようです。あんなに大人しくて引っ込み思案の我が子が、相手が気がついてくれるまで、二度も三度も「さようなら」と挨拶している姿は、とてもけなげで涙が出そうでした。また、先生に「これ、分かる人？」と聞かれた時、自分から手を挙げたと本人から聞きました。今まで、そんな姿を見たことがなかったので、本当に驚きと嬉しさで一杯になりました。(年中／星屋聖仁君)

●本屋で人にぶつかった時、「ごめんなさい」と大きな声で言ったそうです。パパと一緒にだったのですが、パパ自身がびっくりしていました。きちんと自分から言えて、とてもうれしく思いました。(年中／南勇志君)

●「号令は前に出てやるんだよ」と家でも姉と一緒に号令掛けの練習をしています。先日、知り合いのお母さんから「最近、みはなちゃん、人見知りが無くなって、挨拶やお返事がしっかりできるようになってきたね」と言われました。号令掛けなど人前に出たり、挨拶や返事がしっかりできるようになったのは、空手のおかげだと思っています。久しぶりに会う人にはほめてもらえ、親子共にうれしく思っています。(年長／長島心華さん)